

あるむぜお65

府中市郷土の森博物館だより

a | museo NQ 65

2003年9月20日

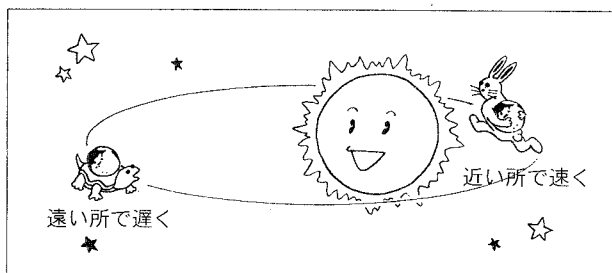


目次

- 1-2 稲刈りと秋のつるべ落とし
- 3 展示会への招待 遺跡の世界2003
- 4-5 イート 鎌倉永福寺と六所宮
- 6 民具発見 ②墓穴掘りは当たり前前の行事
- 7 最近の発掘調査 持ち主は誰？ 宮町で続前出土
- 8 たまRIVER WARS ②見えない標的

夏の太陽は日毎その熱き魂を沈静化させ、少々おとなしくなりつつも、ゆらゆらと程よい暖かさで地上を照らしています。暑くて長かった昼も、徐々に手頃な温度と短い昼に変わり、さっきまで明るいと思ったらもう真っ暗……なんてみなさんも経験ありますよね。特にこの季節、秋の代名詞にもなっているほどに、夕暮れの速さは「釣瓶落とし」とも例えられています。「釣瓶落とし」と言うだけで秋の日の暮れやすいことを意味しますが、本来は田舎に行くと今でも見られる深井戸の水を汲み上げるための縄とか竿を付けた桶を指します。ストーンと一瞬で桶が井戸の底に落ちる様子に、日没の速さのイメージを重ねたのだと思います。秋の日はつるべ落とし……

さて、そのメカニズムはどうなっているのでしょうか？地球が自転しながら太陽のまわりを365日かけて一周していることはご存知です。自転とは、地球の頭とお尻、つまり北極点と南極点を結ぶ心棒を軸にして独楽のように回っていることですが、この時、地球が太陽の周りを一周するコース（公転軌道面）に対しては約23.4度傾いています。しかもこの軌道はわずかに楕円を描くのです。このため地球から見た太陽は、地球が太陽に近い場所を通る時に速く、遠い場所を通る時では遅いといった複雑な動きを示すことになります（ケプラーの法則）。よって、3月の春分から9月の秋分までは太陽が北半球を多く照らし、逆に秋分から春分までは南半球を多く照らします。地球に四季が生じるのはこのためです。そして太陽は東から昇り西に沈んでいきますが、その方角も季節によって異なります。真東から出て真西に沈むのは、春分秋分の時のみであり、あとは夏至に向かって北へ、冬至に向かって南にずれていきます。日の長さも当然違ってきます。地球から見た見かけ上の太陽の通り道を黄道と呼びますが、上記のことからこの黄道も、天の赤道、つまりは地球の赤道面を延長した方向と約23.4度傾いていることになります。そして太陽はこの黄道上を冬は近いため速く、夏は遠いためゆっくりと動くのです。



太陽が地平線に沈んでも、まだ薄い光が見える状態を薄明りといい、この薄明は太陽が地平線の下6度な

いし8度くらい沈んだ時までです。物影のやはっきりとわかる夕暮れは薄明りとその何分間ですが、秋になると太陽の位置が低くなるので、それだけ長い空の気層を横切ることとなり、日射が弱くなります。その上日没時刻の前日差が大きいと、特に速く暮れる感じになるのです。家屋の立ち並ぶ都会の街路などは、夕陽が遮られるので一層釣瓶落としに暗くなっていくわけ

です。秋の夕暮れほどものの哀れを覚える季節はなく、枕草子にも「秋は夕暮れ」と称えています。そんな夕陽に映える、収穫後に干された稲のシルエット……秋は収穫の季節でもあり、田んぼに実った稲を刈っている情景をイメージすることも多いでしょう。毎年博物館で行っている体験学習「こめっこクラブ」の子供たちがなれない手つきで一息懸命育てた米も、この時期ようやく実を結ぶのです。大人も混じってせっせと稲を刈る姿には、まさに秋の夕暮れがぴったりです。古くから稲刈りの後は収穫の祭が色々な地方で行われているようです。これは、稲束を田の神様として初めて家に迎えることを祝うものです。近畿地方の山間農村では、稲を刈った後の祝をカリゴメといい鎌を祭ります。東北地方では、これをカリアゲゼックと呼び、北部では9月頃に行われ岩手や秋田では三九日（みくんち）に新米の餅をついて神に供えています。遅れて南部では福島あたりで十月九日の晩から十日にかけて行われ、この夜につく餅は蛙が田の神の使いとなって背負っていくなどといひます。関東地方から中部地方の長野県にかけては、カリアゲと呼ぶところが多いそうです。

刈上祝の行事については、以前は一般に稲を穂のままにして貯蔵する期間が非常に長かったので、刈上げを一区切りとしてこの祭りを最も重要なものとして扱っているようです。

そんな農業の節目に、秋から冬への変り目が重なるんですね。釣瓶落としの夕陽に映える稲穂の影は最高の風情を醸し出し、日毎短くなる昼の仕事は、うっかりすると予定が狂ってしまうこともままあります。今年の秋も博物館の田んぼでは、日が暮れる前には何とか終わらせようと、一心不乱に稲を刈る子供たちの姿を見ることができません。

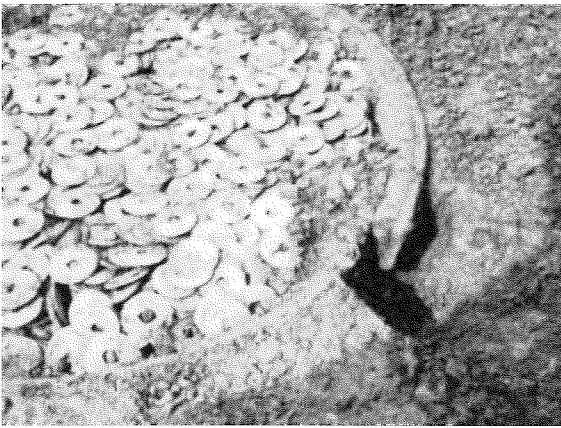
参考文献

「季節の神々」西谷勝也著 慶友社
「天気予知ことわざ辞典」大後美保編 東京堂出版
「やさしい天文学の話」ニコロフ、カンチェ 山崎紀美子訳 東京図書

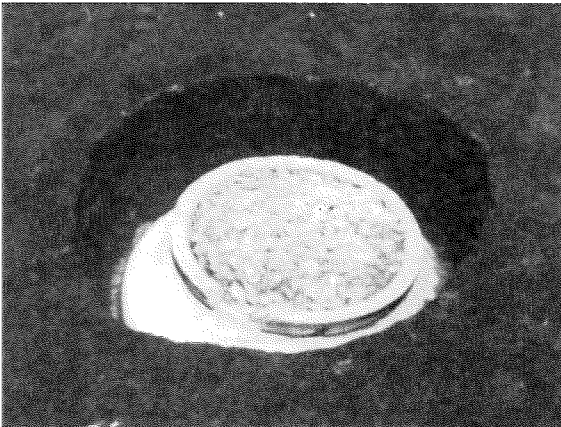
遺跡の世界 2003

埋められた銭の謎 & 最新発掘速報

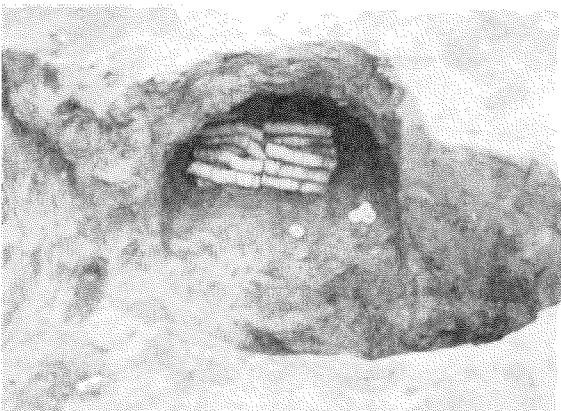
9/14(日) - 10/26(日)



宮西町1丁目2番地地区



宮西町1丁目2番地地区



宮西町1丁目7番地地区



宮西町1丁目28番地地区

大量の銅銭が突如^{とつじょ}地中から掘り出されることがあります。数千、数万という数の大量の銅銭です。その多くは、鎌倉時代から戦国時代にかけて、当時の人々が意図的に埋めたものです。ピークは15世紀。銅銭は、中国大陆を初めとする東アジアの各地で鑄造された、いわゆる渡来銭^{とらいせん}が多くを占めます。

府中市域では、こうした大量の渡来銭がこれまでに4か所で発掘されています。その数は、なんと19万枚に達します。

なぜ、これほど大量の銅銭を埋めたのでしょうか。

従来、このように大量の銅銭がまとまって出土すると、漠然^{はくせん}と万が一に備え貯えたものと考えられてきました。いわゆる備蓄銭^{ひくせん}です。しかし、まとまって出土した銭の全てを備蓄銭と解釈してよいのか、問題がない訳ではありません。特に近年、土地の開発行為に伴って地の神に捧げたり、悪霊を排除するという、呪術的な目的を想定する考えが提唱され、備蓄銭説に大きな疑問を投げかけています。結局のところ、大量の銭を埋めた目的を一律に考えるのは誤りで、備蓄と呪術的な目的の両方の可能性があるようです。

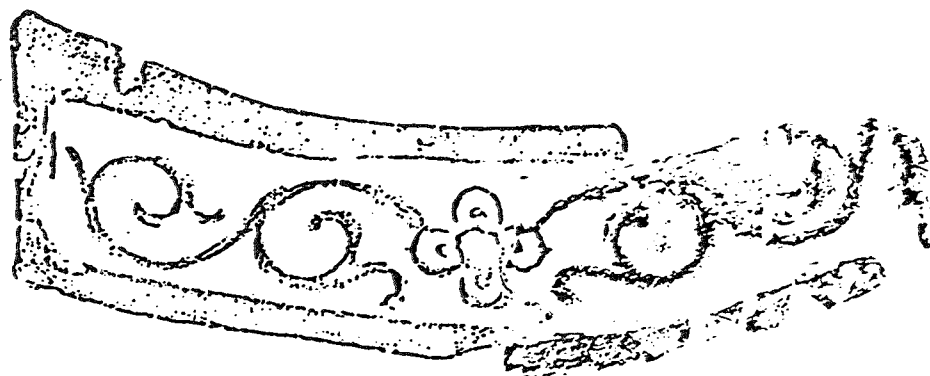
つまるところ、埋められた目的を明らかにするには、個々の状況から推測するしか手立てはないのです。それには、埋められていた状態や、その場所の性格の情報が欠かせません。

普通、こうした大量の銅銭は偶然発見される場合が多いのですが、幸いにも、市内の4か所では考古学的な発掘調査が行われていて、埋められていた状況など詳細の判明するものがあります。今回の特別展では府中市域の事例から、埋められた目的に接近してみたいと思います。

あわせて、市域で行われた発掘調査の最新成果を紹介します。
(深澤靖幸)

鎌倉永福寺と六所宮

深澤靖幸



▲ 鎌倉・永福寺創建軒平瓦（縮尺 1/2）



◀ 大国魂神社付近出土と思われる瓦（縮尺 1/2）

▼ 残された拓本

B：瓦の拓本だね。唐草文軒平瓦の破片かな。どこの出土品？

A：これは、国学院大学に寄贈された柴田常恵さん（1877 - 1954）蒐集拓本の1枚だね。「武蔵府中町」「大国魂神社蔵」と拓本に書込みがあってね。柴田さんの拓本には、ほかにも府中町出土品や大国魂神社所蔵瓦がいくつかあるけれども、いずれも神社やその付近で出土したと考えられるものばかりだから、この瓦も大国魂神社やその付近で出土した可能性が高いんだ。

A：現物は残っていないのかい？

B：大国魂神社が所蔵する瓦は、一通り調査させてもらったことがあるけれど、その中にはなくてね。

B：大国魂神社やその付近からは、古代の武蔵国府の中枢施設に葺かれた瓦とともに、中世の瓦も僅かに出土しているようだけど、この瓦は？

A：数の少ない中世の瓦だよ。しかも、これまで府中では知られていない文様の瓦なんだよ。

▼ 鎌倉・永福寺の瓦

A：実はこの瓦、驚くべきことに、鎌倉・永福寺跡出土瓦によく似ているんだ。

B：永福寺といったら、源頼朝が建立した、当時の鎌倉を代表する大寺院じゃないか。国の史跡に指定されていて、遺跡整備のために発掘調査も行われていたよね。確か、頼朝が奥州征伐の時、平泉で見た中尊寺や毛越寺、無量光院といった諸寺院に感激して建立を思い立って、12世紀末に創建されたんだよね。

A：そう。鎌倉幕府自らが編さんした『吾妻鏡』によると、頼朝が征夷大將軍に任命されたのと同じ建久3年（1192）に中心となる二階堂が完成していて、建久5年まで諸堂宇の造営が続けられているんだ。大掛かりな修理が1240年代に行われたことも記録されているよ。

発掘調査では膨大な量の瓦が出土しているけれど、それが創建段階と修理段階のどちらに属す瓦なのかも、おおよそ判明しているんだよ。

B：それで、問題の瓦は？

A：永福寺創建段階に用いられた瓦に似ているんだ。創建段階の軒平瓦は、花文を中心に、その左右に唐草文をあしらったものが主に用いられていて、一見するとどれも同じようにだけれども、細かく見ると、8種類あってね〔原廣志「出土瓦について」『永福寺跡－遺物編・考察編－』鎌倉市教育委員会 2002年〕。大国魂神社出土と思われる瓦は、その一つに瓜二つなんだ。見ての通り小さな破片で、しかも拓本しか残されていない資料だ

から断定はできないけれど、同じ木型(範)を用いて製作された可能性もあると思うね。

▼ 永福寺創建瓦の分布

A：興味深いことに、永福寺の創建段階のものによく似た軒丸瓦や軒平瓦は、鎌倉市内のみならず、神奈川県横須賀市や伊勢原市、そして福島・群馬・茨城・埼玉県下の、計10数か所で出土しているんだ(小林康幸「埼玉県下に分布する永福寺式軒瓦について」『埼玉考古』32 埼玉考古学会 2001年など)。これらの遺跡のうち、茨城県つくば市の三村山極楽寺跡や福島県桑折町の下万正寺遺跡の場合、頼朝と縁の深い有力御家人が地元にいるので、永福寺創建瓦が各地で出土する理由をそこに求める見解もあるんだよ(橋場君男「三村山創建期瓦の問題点」『中世の霞ヶ浦と律宗』土浦市立博物館 1997年など)。

B：へえー、なるほど。

今までのところを整理すると、その瓦の拓本は大国魂神社出土の可能性が高く、永福寺創建瓦によく似ていて、頼朝と縁の深い御家人の地元でも類似資料が出土している、ということだね。

▼ 中世の大国魂神社

B：だとすると、大国魂神社も頼朝との縁は深いから、永福寺創建瓦が出土する必然性があるということになるね。

武蔵国は元暦元年(1184)以降、頼朝の知行国で、その政治拠点である府中にある社だからね。しかも、「六所宮」とか「六所明神」と呼ばれた(1871年大国魂神社と改称)、武蔵国の主要神を合祀した惣社だから、知行国主である頼朝とは密接な関係にあって当然だ。

A：そうそう。実際、『吾妻鏡』を見ると、寿永元年(1182)には頼朝が妻である北条政子の安産を祈願した寺社の一つになっているし、貞永元年(1232)には六所宮の拝殿が破壊したため武藤資頼を奉行として修造を行わせているんだ。

B：そうだったね。ということは、この拓本の瓦こそ貞永元年の拝殿修造に用いられたもの、と考えられるんだね。『吾妻鏡』の記述を裏付ける資料じゃないか。

でも、永福寺創建瓦が各地に広がるのは、永福寺の創建と同時期か直後のことだろ。六所宮の拝殿修造は永福寺の創建から30年近く経過しているけれど……。

A：瓦を作る範が長期間使われた例もあるから、30年は許容範囲だと思うな。

ただ、永福寺の造営に関しては、畠山重忠(1164-1205)の存在も見逃せないとと思うんだ。

B：そういえば、永福寺二階堂の庭園の巨大な庭石を

ひとりで持ち上げ、指示通りの位置に据えた、という話があったね。

A：そう、二階堂が完成する直前の『吾妻鏡』の記事だよ。畠山氏は秩父の豪族で、国府の役人たちを統括する役職である武蔵国総検校職を務める家柄だ。その上、重忠は頼朝に重用された代表的な御家人だよ。貞永元年の拝殿修造以前にも、畠山重忠を介して永福寺の瓦がもたらされた可能性も捨てきれないと思うんだ。

B：なるほど。確かにその通りだ。いずれにしても、この拓本の瓦が、頼朝と六所宮の密接な関係を具体的に示してくれる訳だ。

▼ 瓦はなぜ少ないのか

B：ところで、大国魂神社境内やその隣接地ではこれまでに何回か発掘調査がされていて、僅かながらも中世の瓦が出土しているのに、この拓本と同じ瓦が1点も出土していないのは理解できないね。軒平瓦とセットになる軒丸瓦や永福寺創建段階のものと同じ特徴を持つ丸瓦・平瓦はどうなんだい。

A：軒丸瓦はもちろん、丸瓦・平瓦ともに出土していないんだ。これまでに大国魂神社の境内やその隣接地で出土した中世の瓦の量そのものがまだ僅かだとはいっても(深澤ほか「大国魂神社周辺」『東京の中世瓦』中世瓦研究会 2000年)、丸瓦や平瓦すら出土していないのは確かに不自然なんだ。ただ、各地で出土している永福寺創建瓦も、点数は非常に少なく、とても一つの堂宇の屋根全体を葺けるだけの量は出土していないようだね。

B：各地で出土している永福寺創建瓦は、ずいぶん特殊なものなんだ。

A：各地で出土する永福寺創建瓦が、永福寺瓦を焼いた窯からもたらされたものなのか、範が別の瓦窯に移動した結果なのか、永福寺瓦の範を作った工人が移動した結果なのか、といったところが判明すると、そうした問題を考える手掛かりになるんだけど。各地での出土数が僅かなため、なかなかハッキリしない状況なんだ。

B：それは残念。それにしても、たった1枚の拓本がもつ情報の多さに驚いたよ。今後、類例が増えて、各地で出土する永福寺創建瓦の意義が、明確になると面白いね。

A：拓本の資料が大国魂神社で再発見されることと、付近の発掘調査で同じ種類の瓦が出土することにも期待したいよ。

民具発見

佐藤 智 敬

第二回 墓穴掘りは当たり前前の行事

前回見たように、博物館に寄贈される民具たちの中には、文献による調査だけではその価値を把握することが難しいものがあります。そして、そうした民具の大半が、かつて日常生活上、様々な関係の中で、当り前に使われていたモノでした。むしろそれを知らないほうがおかしかったような……。今回紹介するのも、

かつての府中で当り前に使われていたモノたちです。一見そう思えないかも知れませんが。

博物館には「念仏講道具一式」なる名前の資料がいくつか保管されています。開館当初から寄贈されたものもあり、個性的な品々が揃っています。内容は直径1メートルほどの大きな数珠、本尊の掛軸、机、鉦、そして帳簿などが中心です。さらに、葬送用の半纏などがついて

いる場合もあります。講中の帳簿のいくつかからは、江戸時代からの年代、加入者、穴掘り人、講を行った期日などを知ることができます。しかし、それを実際に使用した思い出を持つ人となると、府中ではもはや少ないようで、博物館としても調査が難しい面もあります。とはいえ、たくさんの資料を比較分析

することでその全体像をうかがい知ることはできます。「念仏講」とは、集団で念仏を唱える行事、あるいはその集団名（講中ともいう）のことで、府中に限らず日本中に伝わっています。府中では地区毎に14、5軒位が一単位になって、民間信仰の一つとしてはもちろん、冠婚葬祭の単位として重要な役割を担ってきた組織でした。

講中では月1回本尊の命日（地区毎に異なる）に集まり、念仏を唱える講を行っていました。それ自体が社交の場でもあったようです。明治時代には盛んだったようで、「明治6年12月13日第981号新聞」には「蓮月（毎月）16日念仏講と称し、往還（道路上）において老幼男女集り念仏を唱えるを以って風習となす」と、府中の念仏講の様子が紹介されています。

講で一番重要なのは葬式の時でした。むかし、府中

では遺体を棺に入れて、穴を掘って埋める土葬が基本でした。土葬による葬式は、近所の行事の中でもっとも手間のかかるものの一つでした。葬式の準備、深さ2mほどの墓穴を掘る、遺体を運ぶなど、多くの人々の助けを必要としたためです。人が亡くなると、家から講中に知らせがいきます。そして講中では抽選を行い、死者の出た家以外から墓穴を掘る「穴掘役」を3、4名選んだのです。穴掘り、葬儀後に死者を供養するために皆で唱える念仏、法事の準備など、多くの人々の助け合いがなければできないことばかりでした。

葬儀や法事のあとにはきまって飲食が行われました。

共同で料理し、献立としては、うどんや吸物、煮物などをつくっていたようです。その時使用する食器は、念仏講の道具などと共に「椀倉」と呼ばれる共有の倉に保管されている場合があります。

昭和36年9月1日より、東京都では規則で土葬が禁止になりました（『府中市広報』昭和36年9月号4頁に告知掲載）。当然、それと前後して穴掘役も必要がなくなっていくます。宗教も多様化し、葬儀も斎場で業者が行うようになり、料理も店に頼み、共同の食器を使用する機会は減りました。

現在は冠婚葬祭それぞれ専門の業者があり、多種多様な形を選ぶことができます。し

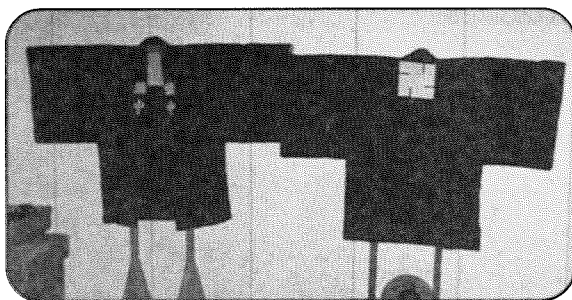
かしそうなのはごく最近のことであり、少なくとも昭和30年代までは、人々の日常の中に、共同で行う葬式、墓穴掘りがあたりまえのようにあったのです。

人の生死にかわり、念仏の信仰に根ざしたモノですからオドロオドロしい印象を持ってしまうかもしれません。しかしこれらは信仰や霊の観念だけでなく、生活の歴史を知る手がかりにもなるのだといえるでしょう。

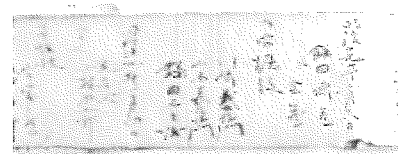
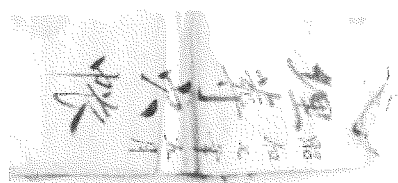


四谷・間島念仏講中の再現

輪になって大きな数珠を皆で繰り、鉦の音とともに念仏を唱える（1998年 住吉文化センターにて）



墓穴掘役の半纏（本宿油屋組使用）



穴掘役を記した「埋葬穴帳」。念仏講の道具とともに寄贈された（多磨町押立山谷）

持ち主は誰?

宮町で錠前出土

宮町1-29番地地区 府中市遺跡調査会 紺野 英二



錠前の出土した様子

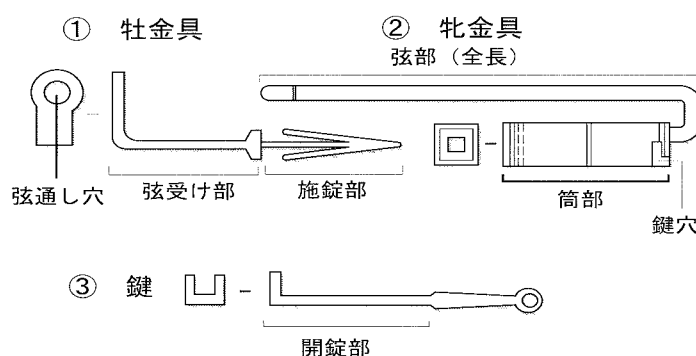
私たちの生活では「カギ」はなくてはならないもののひとつです。かつては家を留守にする時でも「カギ」を掛けない家もあったと思いますが、最近ではそんなのどかな風潮も無くなったのではないのでしょうか。

さて、「あるおぜあ」(61号)で「クルル鉤」を紹介しましたが、今回は宮町1-29番地地区の調査で発見された「錠前」を紹介したいと思います。現代では「カギ・錠前」はその用途によりさまざまな形をしたものがありますが、府中に国府が置かれた奈良・平安時代には「カギ・錠前」は「クルル鉤」と「錠前」の2種類がポピュラーなものでした。

今回紹介する「錠前」は牡金具の部分(長さ10.5cm)で竪穴建物跡の床面近くから見つかりました。「錠前」は牡金具と牝金具を組み合わせて使用し、これを開ける鍵とでセットになるものです。今回は残念ながらセットで発見されていないので、全体の大きさは分かりませんが、他の出土例からすると、全長18cm程度のものと想像できます。「錠前」はおもに倉庫や厨子・櫃などの調度品の施錠に使われるものですが、今回の「錠前」はその大きさからすると、倉庫などの扉に用いられたのでしょうか。

武蔵国府跡ではこれまでに全部で9例のカギ・錠前が発見されています。これらのカギ・錠前のほとんどが竪穴建物跡から出土しています。しかし、一般の農村集落からカギが発見された例はほとんどないことから、奈良・平安時代に竪穴建物の扉にカギをかけたことは考えにくいといえます。実際、「カギ・錠前」が発見された遺跡は、平城京などの都や地方の役所跡がほとんどです。わが府中市も奈良・平安時代には武蔵国の国府が置かれていたことから、「カギ・錠前」は、まさに国府ならではの遺物といえます。

ところで、「カギ」が発見された場所は全国的に見ても、そのほとんどが竪穴建物跡から発見されています。役所の財産を守るために重要な「錠前」の管理人が地面に竪穴を掘って作った小屋に住んだのでしょうか。今後の発見や整理の結果が楽しみです。



海老錠の模式図

今回見つかったのは、牡金具の部分。牡金具の矢印形の施錠部がバネ仕掛けになっていて、牝金具の筒部に差し込むと抜けなくなる。筒部の鍵穴に鍵を差し込んで、このバネを閉じれば、牡金具と牝金具を分離できる。

たも RIVER WARS

② 見えない標的

中村武史

それにしても真夏の
日射はかなり強烈で、い
くら4人が疲れを知ら
ない中学生といえども
さすがに辛かった。行き
道では爽やかに感じら

れた樹々の葉の香りや水のせせらぎも、今となつては彼ら
に何の癒しも与えられなかった。よくよく考えれば誰にも
サルの集団を連れ戻す義務はないのである。あまりにも目
前で起きたことが現実離れしていたために、神秘的な力に
背中を押されるかのごとく使命として受け止めざるを得な
かったのだ。後になって冷静に考えてみれば不自然な要素
が多々あることに気付くのだが、今はそんな余裕はなかつ
た。一の瀬川はいわゆる典型的な河川上流部の景観を示し、
淵と瀬が交互に現れ、流れも速く力強い。あちらこちらに
大きい岩が点在し、川の両側には深い森林が迫っている。
上流域に見られる大きな岩は、その川の源流域の山を造つ
ているものだ。増水などで流されたりするものが侵食され
て下流へと到達する。従つて
中流域から下流域に向かつて
見られる河原の石は種類に
よって異なるが、大方段々と
丸みを帯びて小さくなってい
くのである。

「もう少しして柳沢川との合流
点だぞ。あの爺さんの言うこ
とが本当なら舟が用意されて
いるはずだから、踏ん張って
歩くぞ。」地図を片手にすつか
りリーダー気分のエノキンが
号令をかける。「ねえ、そこで
ちょっと休憩しようよ、私も
うへトヘトで…」小学生並み

に体の小さいセイコが根を上げる。「大丈夫よ、みんなもそ
のつもりだから」これまた体は細いのだが、妙に体力のある
ハニーが後押しする。とその時タウ工が違和感のある表
情で、「あれ？何か変だぞ、あそこで人が倒れているよ、ほ
ら」と指差す方向には、おそらく渓流釣りの客だろう、確
かに岩にしがみつこうにして男が倒れていた。

急いで現場近くに降り立つとどうやら気絶している様子。
「どうしたんですか？しっかりしてください！」エノキンが
耳元で大声に問う。ハッと気付いたその男は、「サ、サルの
軍団だ、いきなり襲いかかってきて、釣ったヤマメは奪
うは持って来た弁当は食われるは、一体何がどうなってい
るのか」……あの老人の言っていることは本当だったのだ。
今まさに起こった現実として4人は再認識するしかなか
った。しかし肝心のサルたちの姿はもうなかった。時すでに
遅しのようである。「奴ら、ヤマメを狙ったのかな？」上流
域の魚類では代表的なイワナ・ヤマメであるが、最近では
養殖ヤマメの割合も多く必ずしも天然とは限らない。それ
でも釣り客たちは魅せられてやって来る。そんな楽しみを

邪魔されてはたまらない。おそらくサルたちは特に餌とし
て必要だったのではないのだろう。あくまで多摩川源流神
の暗黒面にコントロールされた仕業、悪行の一環なのであ
る。それもまだ始まったばかりの……。幸い怪我はないよ
うだったので、一同は少し休息を取りながらあたりの散策
を行った。釣り人が実際に襲われていた時間はほんの数分
で、まるで一陣の風のごとく、瞬く間の出来事だと言つて
いた。サルは相当数の集団だそうぞ。もちろん下流方向へ
と移動したにちがいない。「とにかく早くそこあの爺さんが
言っていた舟をゲットしないと、どうやって追いつか
ねえぞ、さあさあ出発だ」エノキンに煽られて再び険しい
山道を歩き始める4人。「セイコ平気か？舟までたどり着
きゃあとはスイスイだからさ」タウ工が元気付ける。「でも
舟って本当に用意されているのかな～？」ハニーが
半信半疑につぶやく。未だ見えない標的に向かつて追いつ
くことすらままならない状況で、ましてや捕獲など愚の
骨頂である。方策さえも見つからないのである。丹波川か
ら多摩川本流と下り、せいぜい奥多摩湖到達までにはケリ

を付けたい気持ちは強いが、
どうにもすべがないのである。
いくら勇敢で結束が固くとも、
いかんせん中学生には違いな
いのだから。

と、その時である、風も吹か
ないのに木々の葉がざわめい
た。「ヤツラだ！」エノキンが
疾風ののごとく林に駆け込んだ。
無謀な行動に3人はあつけに
取られて呆然とたたずんでい
た。「エノキン！」呼べども
答えず、帰還せず、そうかと
言つて誰も後に続く勇気も出
ず……しばらく様子をうかがつ

ていたが、何の変化もおこらず、ただただ時が進んでいく
ばかり。「エノキンのことだ、追い疲れたらこの先でまた現
れるさ。奴はこの川の地理に最も詳しいんだからね。」タウ
工の言葉に一同頷いて再び歩き始めると、「あれ？あそこ
の太木に縄でつり付けてあるやつ……もしかして、船？」「え
っ？あれが、船？」それはおそらく水源林の木で作ったの
であろうか、明らかに何の変哲もないいわゆるイカダであ
った。丸木を並べて縛りつないだ極めて一般的にイメージ
されるあのイカダである。「え～！こんなもんに乗って川下
りすんの～！」疲れているところにさらに精神的苦痛が加
わったのだろう、セイコがたまらず絶叫する。筏道……か
つて多摩川上流から材木の筏に乗って筏師が河口の品川港
まで下つていったという。品川で材木を売り、帰りを歩い
て戻る筏道。彼らに付きつけられたのはまさに筏師もどきの
パフォーマンスなのだろうか。さすがに冷静なハニーも
タウ工も押し黙ってしまった。エノキンは一体どこに行つ
てしまったのか？勢い良く流れる水音が山間に木霊するば
かり……



佐藤秀明『多摩川』(山と溪谷社 1993年)より